

生活が育てた芸能と交流誌

ウェルズ恵子

(第3回 コーディネーター)

ハワイ日系人たちは文化に生活の記録を刻みつつ、集団的記憶を醸成・継承してきた。音楽や盆踊り、交流会や雑誌の発行などといった文化活動は、互いのつながりを深めると同時に共同体意識を形成する助けとなり、世代間の交流を促した。そうした文化活動はまた、日系人が日本との関係性を確認し、アイデンティティを確立する役割も果たした。連続講座の第3回では、移民が日常生活の中ではぐくみ育てた文化が、徐々に共同体の伝統となって、公式文書には残り得ない人々の感情や絆の記録となったことを追った。

中原ゆかりの「ハワイ松竹劇団と「別れの磯千鳥」:美空ひばり12歳のハワイ公演をめぐる」は、ハワイにおいて日本の音楽・芸能の文化活動に記録されたハワイ日系人の日本とのつながりを詳細に読み取っている。日系人フランシス・ザナミ作曲の「別れの磯千鳥」を、若干12歳だった美空ひばりがただ一度だけの練習で見事に歌ってのけたという逸話を、ハワイ松竹劇団は半ば伝説化して語り継いでいた。中原論文は、このことの意味を移民の無形の記録としてあぶり出している。また、安井真奈美の「ハワイと故郷の島を結ぶ:山口県^{おきかひろ}沖家室島の雑誌『かむろ』より」は、ハワイに移民を送り出した日本の人々が地域の雑誌を作って海外在住者との交流を保ち続けた様子を探っている。島の人々が日常生活を丹念に記録し、加えて、通信や消息といった個人的なやりとりや、文芸作品から愛郷の理想の発現までを掲載することで、太平洋をまたいだ島と島の間に関結した意識空間を作り上げていたことがわかる。安井の丹念な記録調査から、この民間誌が現在のフェイスブックやインスタグラムといったソーシャルメディアに似た役割を果たしていたと思うのは、私だけではないだろう。

芸能や民間誌といったごく日常的で権威のない文化(ヴァナキュラー文化)は、不要であれば即座に消滅するが、人々が必要を感じる限り人々の自発的な努力によって生き続けるという特徴を持っている。太平洋をまたいで行き来した歌や交流の言葉と画像はまさに、文化とは人をつなぐもの、生きるとは人とつながることなのだとすることを、示してくれている。

